後継永久歯よりも深部に埋伏した左側上顎第二乳臼歯の1例

中西 徹・嶋田 淳・佐野正之*
河内和美*・山本美朗

A case of an Impacted Upper Second Deciduous Molar Superior to the Permanent Succesor Tooth

Tohru NAKANISHI・Jun SHIMADA・Masayuki SANO
Kazumi KAWACHI・Yoshirou YAMAMOTO

Abstract: A case of an impacted second deciduous tooth superior to an impacted second premolar is reported. To our knowledge, only three similar cases have been reported in the Japanese literature. All reported cases occurred in the mandible. Our very rare case was the first to arise in the maxilla. This case was thought to be caused by the formation of a follicular cyst around the deciduous tooth crown and an abnormal position of the tooth germ of the second premolar.

Key words: impacted tooth (埋伏歯), prermolar (小白歯), deciduous tooth (乳臼歯)

緒 言

埋伏歯は、口腔外科診療のなかでは、日常扱う頻度の多い疾患である。しかし、乳歯の埋伏は、一般的に永久歯に比べその頻度は少なく、国内の小児歯科領域での報告では、発現頻度0.1%と報告されている¹⁾。今回、著者らは、後継永久歯よりも頭頂側に埋伏した左側上顎第二乳臼歯の1例を経験したので、報告する。

症 例

患 者: 12歳, 男。

初 診: 平成2年2月■。

主 訴: 左上の歯が生えてこない。

既往歴: 母親は妊娠中健康で、出産も満期正常分娩、出生時の体重は3120gであった。2歳時に流行性耳下

腺炎に罹患した以外特記すべき事項はなかった。

家族歴: 父母同胞に歯の先天的欠除はなく、その他特記すべき事項はなかった。

現病歴: 3歳時より多数の齲蝕歯のため某小児歯科医院に通院し、左側第二乳臼歯の埋伏を指摘されていた。その後3か月ごとの定期検診を受け3歳10か月時のX線写真で左側第二乳臼歯の歯冠上にかすかに円形の不透過像があることを指摘されていたが、母親の出産等で通院できなくなった(写真1)。6歳になっても、左側第二乳臼歯が生えてこないの、両親が心配して、再度同歯科医院を受診した。X線写真で第二乳臼歯の埋伏と第二小白歯と思われる歯胚が存在していることを指摘されたが、父親の転勤により通院することができなくなり、そのまま放置していた(写真2)。平成8年11月に再び富山に戻ってきたため、再度同医院を受診した。その間に、腫脹等の異常所見は認められなかった。

現 症: 体格は中等度で栄養状態良好。全身的に異常は認められなかった。局所所見では、左側第二乳臼歯と第二小白歯が萌出してない以外、異常所見は認められなかった。

X線所見: 左側第二小白歯の埋伏を認め、その上方に、上顎洞内に左側第二乳臼歯と思われる不透過像を認めた(写真3)。

明海大学歯学部口腔外科学第一講座

(主任: 山本美朗教授)

*あすなろ小児歯科医院

(主任: 佐野正之)

First Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Meikai University School of Dentistry
(Chief: Prof. Yoshirou Yamamoto)

*Asunaro Pediatric Dental Clinic (Chief: Masayuki Sano)

受付日: 平成9年5月21日

写真1 3歳10か月時 X線写真

左側第二乳臼歯の歯冠上にかすかに円形の不透過像がある

写真2 6歳時 X線写真

左側第二乳臼歯の歯冠上に不透過像がある

写真3 12歳時 X線写真と摘出した歯牙

左：左側第二乳臼歯の歯冠上に第二小臼歯と思われる不透過像を認める
右：摘出した第二小臼歯と第二乳臼歯

写真4 病理組織像 (H-E 染色×100)

左：上皮を示す

右：不規則に形成された象牙質もしくはセメント質様構造

臨床診断：左側第二小臼歯および第二乳臼歯の埋伏。

処置および経過：矯正科を対診し本人と親との相談の上2本の埋伏歯を抜歯することに決定した。そこで、平成8年12月に局所麻酔下で左側第二小臼歯と左側第二乳臼歯の埋伏抜歯術を行った。まず歯槽頂側にある、左側第二小臼歯を口蓋側の歯槽骨を除去後抜歯した。その後、上顎洞前壁に埋伏する左側第二乳臼歯を抜歯した。この2本は、完全に接しており、第二小臼歯は、歯冠を口蓋側に向け、根尖を頬側に向けて埋伏していた。すなわち第二小臼歯頬側根尖部に第二乳臼歯の歯冠が接して存在した。また、左側第二乳臼歯の歯冠側には、肥厚した歯嚢を認めたため、それを搔爬摘出した。摘出した左側第二小臼歯は、歯冠部の形態は正常であったが、根尖部口蓋側に陥凹を認めた。左側第二乳臼歯は、歯冠の頬側

近心咬頭に、わずかな陥凹があり、頬側根は吸収され、口蓋根は釣り針状の屈曲を示していた(写真3)。術後、歯冠部周囲より摘出した組織を病理組織学的に検討した。

病理組織学的診断：歯嚢(過形成)。

病理所見：一部円柱状もしくは立方状の歯原性上皮で裏打ちされた嚢胞様、粘膜様の結合組織で構成され、その中に歯原性上皮の散在および不規則に形成された象牙質様もしくはセメント質様構造がみられた。このことから、本組織が歯胚を覆う未熟な結合組織であることが想定された。炎症性変化は軽度であった(写真4)。

考 察

一般に、乳歯埋伏の出現頻度は永久歯に比較して低い。本症は、乳歯とその後継永久歯が同時に埋伏し、かつその後継永久歯が乳歯よりも低位に埋伏した、非常にまれな症例と考えられた。著者らが、渉猟しえた過去10年間の文献で同様の報告をしているのは、矢田ら²⁾、熊坂ら³⁾、および鶴田ら⁴⁾の3例のみであった。これらは、3例とも下顎第二乳臼歯の症例で、全身の疾患の合併なく処置まで行ったものは、熊坂ら³⁾の報告のみであった。

一般に、歯の埋伏の原因として、全身的要因と局所的要因があげられるが、特に局所的原因による埋伏の報告はまれである。患児は、全身状態も良好で、胎生期および出生後においても原因になりうる様な疾患がなく、埋伏の原因は局所要因によるものと考えられた。石川ら⁵⁾は、局所要因による歯の埋伏原因として

- (1) 埋伏歯の歯胚の位置および萌出方向の異常
 - (2) 埋伏歯の萌出部位の不足
 - (3) 埋伏歯自身の大きさと形態の異常
 - (4) 埋伏歯の濾胞性歯嚢胞、歯牙腫
 - (5) 隣在歯の歯根嚢胞
 - (6) 顎骨の腫瘍
 - (7) 顎骨との癒着あるいは顎骨の厚すぎる皮質、歯肉の線維性肥厚
 - (8) 骨折
 - (9) 先天性梅毒、内分泌腺の障害
 - (10) 遺伝
- があると述べている。

本症例では、乳歯の埋伏の原因は歯嚢の嚢胞化が考えられた。これは、病理組織学的所見で歯原性上皮で裏打ちされた嚢胞様、粘膜様の結合組織で構成されていることが示されていることから判断された。しかし、それ以外の外傷の既往、腫瘍、歯肉の線維性肥厚、遺伝、全身の疾患等の要因は認められなかったことから、永久歯の埋伏は歯胚の位置および萌出方向の異常が原因ではないかと推測された。この点について、乳臼歯と小臼歯の位置関係がどのようになっているのかについ

て発生学的に検討した大江⁶⁾は、小臼歯原基は、出生時に乳臼歯の近心舌側咬頭の舌側にあるが、その後、乳臼歯の咬合面側に位置するようになり、乳臼歯の根が少し伸び始める頃に再び小臼歯原基は乳臼歯冠の舌側にきて、乳臼歯が萌出する頃に、ほぼ歯頸部に、しかも遠心よりに位置すると述べている。したがって、本症例では乳臼歯の根が少し延び始める時点で、何らかの原因で小臼歯原基の動きが止まったことが起因と考えられた。これについて、Euler⁷⁾によれば、乳臼歯の上方移動により小臼歯原基が動くのではないかとしていることから、乳臼歯の根が少し延び始めた時点で、乳臼歯の歯嚢に何らかの理由で嚢胞化が起り、乳臼歯の上方移動が妨げられた結果、小臼歯原基の動きが止まり、乳臼歯と後継永久歯の位置関係が逆になったまま成長したと推測できた。さらに、第一大白歯の萌出がおこり、この時点で第二乳臼歯が埋伏して萌出していなかったため、leeway spaceが減少し、小臼歯の萌出スペースがなくなり小臼歯の埋伏が起こったと考えられた。乳臼歯に認められた頬側根の吸収と口蓋根の湾曲は、この埋伏した小臼歯の萌出力がその直下にある乳臼歯に作用したために起こったものと考えられた。

結 語

今回著者らは、全身の疾患を有さず、上顎第二小臼歯歯胚の位置異常によって発生したと思われる、後継永久歯よりも深部に埋伏した上顎第二乳臼歯のきわめてまれな症例を経験したので、文献的考察を加え報告した。

参 考 文 献

- 1) 工藤真幸, 今田妃名子, 他: 本学歯学部附属病院小児歯科外来における乳歯埋伏についての臨床的考察(第2報)(妙). 小児歯科学雑誌 32: 392 1994.
- 2) 矢田育男, 塚本末廣, 他: 第二種臼歯の下部に第二乳臼歯が埋伏した一症例. 福岡歯科大学学会雑誌 13: 285-287 1987
- 3) Kumasaka, S., Hamada, S., et al: A Case of Impacted Deciduous Second Molar Caused by Anomalies in the Position of the Tooth Germ. Bull of Kanagawa Dent Col 15: 71-78 1987.
- 4) 鶴田仁史, 石塚康男, 他: 後継永久歯よりも下方に埋伏した第二乳臼歯の一例. 広島大学歯学雑誌 23: 207-210 1991.
- 5) 石川悟朗, 秋吉正豊: 口腔病理学. 第3刷, 永末書店, 東京, 1983, 52-58 頁.
- 6) 大江規玄: 歯の発生学 形態編. 医歯薬出版, 東京, 1968, 110-113 頁.
- 7) Euler, H.: Über die Lageentwicklung der Prämolaren: Deutsch. Z. M. Khlk. 4: 746-755 1937.